

# 琉球大学学術リポジトリ

## 小学生・中学生が認知する家族環境：その尺度構成

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前原, 武子, 金城, 育子, Maehara, Takeko, Kinjyo, Ikuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9707">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9707</a>

## 小学生・中学生が認知する家族環境 — その尺度構成

前原武子\* 金城育子\*\*

### Family Enviroment perceived by children — Constructing of the scale

MAEHARA Takeko KINJYO Ikuko

現代の家族は史上まれにみる試練に直面しているという(岡堂, 1998)。夫婦の葛藤, 子どもの問題行動, 高齢者問題など, 家族の危機に繋がる問題は多様にある。家族が抱える問題の理解と解決が, ますます心理学に求められていることはいうまでもない。本研究は, 子どもの発達の基盤として家族を位置づけ, 子どもが自分の家族環境をどう認知し評価するのか, その家族システムの特徴を明らかにしようとするものである。

これまででも, 多くの研究が子どもの発達に及ぼす家族の影響に関心を払ってきた。しかし, かつては, そのほとんどが, 親, 特に母親の子どもへの影響力に焦点を当てたものであり, 家族全体やそのシステムに関心を払ったものではない。家族の中では, 親子関係だけでなく, 夫婦関係, きょうだい関係, 親と他のきょうだいとの関係などのサブシステムが存在し, 相互に影響しあっている。そのような家族システムの視点に立った研究が始まったのは, 最近のことである(佐々木, 1996)。本研究も, 子どもの発達に及ぼす家族集団への関心から出発した。しかし, 先へ進むためには, 家族集団の測定方法に対する疑問を解決しなければならない。

たしかに, これまで, 特に欧米では, 家族の

特性を客観的, 定量的に測定するために多くの尺度が開発されてきた。そして, 野口・斎藤・手塚・野村(1991)は, Moos(1987)の開発したFES(Family Environment Scale)日本語版の開発を試みた。その尺度は凝集性, 表出性, 葛藤性, 独立性, 達成志向性, 知的文化的志向性, 活動娯楽志向性, 道徳宗教性, 組織性, 統制性の10下位尺度90項目から構成されている。また, 佐伯・飛鳥井・三宅・箕口・山脇(1997)はEpstein, Baldwin, & Bishop(1983)によるFAD(Family Assessment Device)日本語版の開発を試みた。その尺度は問題解決, 意志疎通, 役割, 情緒的反応, 情緒的関与, 行動統制, 全般的機能の7下位尺度60項目からなる。両尺度は欧米で有望な尺度として評価されているが, 項目数が多いことや下位尺度の因子構造が不明瞭であること, 特に小学生や中学生への実施困難さなどの問題を含んでいる。西出(1993)は, 中学生とその両親を対象に, 日本で使用に耐える尺度の開発を試みた。欧米で開発された尺度項目を参考に, 「家族凝集性」, 「家族ルール」, 「家族組織の柔軟性」, 「家族内コミュニケーション」, 「家族に対する評価」の各下位概念をもとに中学生および両親に使用可能な尺度項目を検討した。その結果, 「親密で

\*琉球大学教育学部 \*\*教育学部非常勤講師

自由な家族内交流」と「家族に対する評価・凝集性」のまとめりと、「家族組織の柔軟性・構成度」と「家族内の秩序・ルール」のまとめりからなる尺度であることを報告している。前者は、円環モデル（Olson, Sprenkle, Russell, 1979）の凝集性が適応性の次元（コミュニケーションスキルと家族満足度）と結びついたものであり、家族のストレス耐性を測定する「家族強度」と高い正の相関を示した。後者の次元は、極端でないことが家族機能に対して促進的であると仮定されたが、「家族強度」との相関はその仮説を支持する値を示さなかった。また彼は因子分析の結果4因子を抽出したと記述しているが、第1因子と第2因子の両因子に高い負荷を示す項目が多くみられ、その上、因子寄与率も全体で15.29（父親標本。母親、中学生の子どももほぼ同じ結果だと報告された。）という低い値にとどまっている。これら先行研究から、文化的背景を考慮した家族理解の必要性和、同時に下位尺度の独立性が保障される新しい尺度構成の必要性が指摘される。

そこで、本研究では、われわれが居住する地域において特徴的に見られる家族特徴の測定を目標に尺度作成を試みる。われわれが居住する地域（沖縄県）では、離婚率が全国1高く、出生率が全国1高く、そして百歳以上の高齢者が世界1多いという特徴がある。したがって、沖縄県の子どもたちにとっては、他県の場合より、単身家族が多かったり、きょうだいが多かったり、祖父母との同居者が多かったり、あるいは祖父母を中心とした親族のネットワークが広がったり、といった家族形態を特徴としている。そのような家族形態は、また独特な家族システムとして機能し、子どもの発達に影響するであろう。たとえば、沖縄県、特に地方では、都市化が進んだとはいえ、家族同士が解放的に交流する。近距離に多く居住する祖父母や親族、あるいは隣人との親密な関係の中で、子どもたちは自分の家族内のシステムだけでなく、家族間システムの影響をも受けながら発達することになる。本研究はそのような家族環境を考慮しながら、基本的には、Moos and Moos (1975) に

よる家族環境の概念に基づいて尺度の作成を試みる。すなわち家族環境とは、個々の家族成員が認知する家族の集団としてもつ心理・社会的特性を意味する。小学生および中学生が自分の家族をどう認知するのか、その特徴を明らかにするための尺度作成を試みるのが本研究の主なねらいである。

尺度作成にあたって、本研究は、先行研究が報告してきた尺度を参考にしながらも、文化・社会的背景を考慮し、さらにもう1点、「家族に対する評価」に関して特別な考慮を払った。すなわち、子どもは自分の家族環境を認知するだけでなく、評価をする。これまで、たとえば西出（1993）は、「家族に対する評価」を家族尺度の下位尺度に含めてきた。しかし、自分の家族を肯定的に評価するかどうかは、認知された家族環境の違いによって異なるのではなからうか。そして、その家族に対する肯定的評価の媒介によって、家族環境の違いが子どもの発達の特徴に影響するのではなからうか。

では、どのような家族環境が家族の肯定的評価につながるのだろうか。家族環境尺度として、これまで広く使用されている尺度にOlson (1979)のFACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale)がある。それは、家族メンバーがお互いに対してもっている情緒的絆をあらわすとされる凝集性と、内的・外的な圧力に対する家族の変化の柔軟性をあらわすとされる適応性の2つの次元を組み合わせる家族を類型化して理解しようとするものである。凝集性と適応性の両方が中間域に位置するときには家族の健康度が高く、極端なほど病理性が高いと解釈される。しかし、後続の研究結果は、そのカーブリア性をめぐって一貫した結果を得ていない（立木・栗本, 1994；西出, 1993；Walker, McLaughlin and Greene, 1988）。家族凝集性のカーブリア性を見出さなかった先行研究をレビューした鈴木と小川（2000）は、その結果について、家族凝集性が家族のサポートや思いやり、親密さ、一体感といった「家族の温かさ」に近いものとして受け取られたためではないかと解釈している。その解釈に従えば、

新しく作成される家族環境尺度が凝集性や温かさを構成因として含み、その構成因が家族評価と正の相関関係にあることを示すならば、その尺度の妥当性の一部が確認されたことになる。そこで、本研究では、家族環境尺度を作成し、その構成的妥当性を検証するために家族に対する肯定的評価を取り上げる。さらに尺度の妥当性を検討するために、自尊感情と家庭における社会的スキルを取り上げる。自尊感情とは全体としての自己に対する肯定感情を意味する。家族に対する肯定的評価の高い家族環境構成因が高いほど自己を肯定的に評価する傾向が高くなることが予想される。また、社会的スキルとは、円滑な人間関係を営むために必要な行動や、人間関係を阻害するような行動を意味するものである。子どもが家庭内で円滑な人間関係の行動スキルを示すかどうかは家族環境の特徴を反映するものであり、特に家族の肯定的評価につながる家族環境との関連性が予想される。本研究は、それらの予想を小学生および中学生で吟味することによって、本研究で開発された家族環境尺度の妥当性を確認しようとするものである。

## 方 法

**家族環境測定項目の選定** 子どもをとりまく家族の特徴について、大学生によるKJ法をもとに48項目を用意し、さらに、先行研究が報告する尺度項目をも参考にしながら、項目を選定した。各項目は「とてもあてはまる」、「少しあてはまる」、「なんともいえない」、「少しあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5点評定により回答が求められた。

表1. 自己価値

自分のことがとても好き
自分の毎日のすごし方は気に入っている
(-) よく、自分がいやになることがある
今の自分にとっても満足している
(-) 今はちがった自分になりたいと思う
自分のような人が好き
自分のしていることを考えるといらだつ
(-) 逆転項目

## 家族環境尺度の構成的妥当性検討のための測定尺度

①自尊感情の測定 Harter (1982) による「認知されたコンピテンス尺度」の下位尺度「自己価値」の項目を参考に7項目用意した(表1に示す)。「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5点尺度。

②社会的スキルの測定 戸ヶ崎と坂野(1997)による家庭における社会的スキル尺度のうち20項目中12項目を一部表現を修正し用いた(表2に示す)。「関係維持行動」(例:家族の人にならぼうな話し方をする(逆転項目)),「関係向上行動」(例:家族の人のために、よく手伝いをする),「主張行動」(例:家族の人に叱られた時、自分が正しくてもいいわけできない(逆転項目))の3因子からなる。

表2. 社会的スキル

### 関係維持行動

- (-) 何か気に入らないことがあるとき、つい、家族のせいにする
- (-) 家族の人に注意されると、反抗することが多い
- (-) 家族の人にらなぼうな話し方をする
- (-) 夕食にきらいなものが出たら、つい作った人に不満を言う

### 関係向上行動

私は、家族の人のために、よく手伝いをする  
 家のそうじや、かたづけをきちんとしている  
 家族の人が困っていたら助けてあげる  
 家族の人の手伝いを引きうけたら、最後までやりとおす

### 主張行動

- (-) 家族の人に「自分は、いやだ」となかなか言えない
- (-) 家族の人にしかられたとき、自分が正しくても、いいわけできない
- (-) 家族の人に反対されるのではないかと思っ、て、したいことができない
- (-) 家族で何か相談しているときに、なかなか自分の意見を言えない
- (-) 逆転項目

表3. 家族満足度

- 私は、自分の家族が大好きである  
 私は、自分の家族を誇りに思っている  
 (一) 自分がよその子どもだったらいいのに、  
 と思う  
 私は、自分の家族にとっても満足している  
 (一) 私はときどき、自分の家に帰りたくない、  
 と思う  
 私は、大人になったら、今のような家族  
 を作りたい  
 (一) 私は、他の人に自分の家族のことを知ら  
 れたくないと思う  
 (一) 私には、家族のことで悩んでいることが  
 ある  
 私は、家族と一緒にいると、とても気持ち  
 が落ち着く
- 
- (一) 逆転項目

**家族満足度の測定** 自分の家族が大好きであるとか、誇りに思うなどの9項目(逆転4項目)。「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5点評定により回答を求めた。項目は表3に示すとおりである。

**被験者** 沖縄県西原町内の小学校2校の5、6年生546名(男子292名と女子254名)と同一地域の中学校2年生201名(男子100名と女子101名)の計747名。西原町はかつては農村地帯であり、伝統的な家族の形態をもつ古くからの地元民と、那覇市のベットタウンとしての新興住宅開発に伴って転居してきた核家族中心の比較的新しい住人からなる町である。

**デモグラフィック変数の測定** 現在同居している家族の構成、きょうだい数、夜間に親が在宅しているかどうかについて回答を求めた。その結果、家族構成は、核家族が小学校で70.7%、中学校で72.0%であった。きょうだいの数は平均は3.46(小)、3.42(中)人であった。また夜間に親が在宅している比率は90.9%(小)、91.5%(中)であった。

## 結 果

### 1. 家族尺度の因子分析について

用意された48項目について、小学校、中学校

別、および小学校と中学校込みの因子分析を行った。小学校および中学校で共通の因子を抽出することを目標に主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、命名可能な4因子を抽出した。因子寄与率は、44.28%であった。表4は小学校・中学校込みの因子分析結果を示したものである。第1因子には「元気がない時、家族の誰かがすぐに気づいて励ましてくれる」、「何か悩んでいる時、わたしの家族はいつでも相談相手になってくれる」などの項目に高い因子負荷量が見られる。情緒的サポートや、凝集性、コミュニケーションなどを含むことから、「情緒的結合」因子として命名する。第2因子は、「よく親戚づきあいをする」や「よく他の家族と食事をする」などの項目に負荷量が高いことから、「社交」因子と命名する。第3の因子は「何事にもベストを尽くしてやらなければ、ひどく叱られる」や「きまりを守ることがとても大事にされる」などの項目に因子負荷量が高いことから、「価値・規範」因子とする。第4因子は、「地域の人との付き合いがとても嫌い」とか、「私の友だちの名前をほとんど知らない」などの項目に負荷量が高いことから、「遊離」因子と命名する。「価値・規範」因子に含まれる3項目が「情緒的結合」因子にも高い因子負荷量を示している。しかし小学校、中学校別の因子分析では「価値・規範」因子独自の項目として位置付けられていた。また「遊離」因子の1項目に低い因子負荷量が見られる。しかし中学校での因子分析で、その因子の負荷量が高かった。したがって、一部明瞭さに欠ける項目もあるが、命名にもとづいて、各因子に含まれる項目の得点を合計した値を因子の得点として今後の統計処理に使用する。

### 2. 家族尺度の信頼性

各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子で.85、第2因子で.58、第3因子で.75、第4因子で.62であった。第2、第4の因子で値がやや低い、第1、第2因子の信頼性は満足できるものである。

### 3. 家族に対する満足度について

家族に対する評価尺度の総得点と各項目得点

表4. 家族環境尺度の因子分析

情緒的結合 (F1)		小・中学校込			
		F1	F2	F3	F4
30	私の家族では、いろいろな面で助け合っていると思う	.75	.10	-.10	.05
23	元気のない時、家族の誰かが、すぐに気づいて励ましてくれる	.77	.02	.06	.12
2	何か悩んでいる時私の家族はいつでも相談相手になってくれる	.76	.02	.00	.09
9	何か嬉しいことがあるとき、家族のみんなでよろこびあう	.70	.20	.04	.06
10	私の家族は、なんでもよく話をする	.70	.19	-.11	.04
31	家族には自分の意見を言いやすい	.68	.07	-.07	.09
46	誕生日などの記念日には、家族みんなで楽しむ	.52	.30	-.18	.11
価値・規範 (F3)					
12	私の家では、何事にもベストをつくしてやらなければ、ひどく叱られる	.25	.31	.60	-.10
5	私の家では、学校でよい成績をとることが、とても大事にされる	.11	.14	.46	-.10
43	手伝いなどのやるべきことをやらないと、家族からひどく叱られる	-.01	.37	.51	-.03
1	私の家では、きまりを守ることがとても大切にされている	.55	.13	.39	.04
8	家族で決めたことは、厳しく守られる	.47	.33	.46	.06
22	私の家では、時間をきちんと守ることが大切にされている	.42	.12	.50	-.04
33	私の家では、何事もいい加減にすますことはゆるされない	.27	.18	.52	-.07
遊離 (F4)					
42	私の親には、友達が少ないと思う	-.16	-.05	.20	.68
41	私の家族は、私の友達の名前をほとんどしらない	-.26	.07	.12	.59
21	私の家族は、地域の人との付き合いがとても嫌いだ	-.21	-.04	.21	.59
36	おしゃれや派手な格好で目立つことをしても、私の親は何もいわない	-.10	.30	-.15	.46
40	私の親は、私の将来に期待をかけていない	-.34	.16	.05	.48
20	私の家族は、おたがい、誰がどこで何をしているのかほとんど知らない	-.35	.09	.21	.28
社交 (F2)					
28	私の家族は、よく親戚付き合いをする	.12	.66	-.13	-.22
49	私の家族は、よく他の家族と食事をする	.02	.64	-.14	.03
25	私の家族は、キャンプやビーチパーティが好きだ	.36	.51	-.06	.01
4	私の家族は、よくスポーツをする	.34	.38	.04	-.17
14	私の家族は、よく他の人をつれてくる	-.02	.54	.07	-.10
	累積寄与率 (%)	19.72	28.81	36.86	44.28

表5. 家族環境を説明変数、家族に対する満足感を基準変数とした重回帰分析

	小 学 校			中 学 校		
	標準 偏回帰係数	F	偏相関係数	標準 偏回帰係数	F	偏相関係数
情緒的統合	0.67	218.86***	0.57	0.7	85.51***	0.58
価値・規範	-0.24	29.40***	-0.25	-0.36	24.14***	-0.35
遊 離	-0.19	24.36***	-0.23	-0.15	5.78*	-0.18
社 交	-0.05	1.3	-0.05	-0.01	0.01	-0.01

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

との相関係数は.75～.44の高い値を示したので、すべての項目の総得点を家族満足度得点とする。その得点を目的変数とし、家族環境の4因子を説明変数とした重回帰分析を校種別に行ったところ、表5に示す結果が得られた。校種の違いにかかわらず、「情緒的結合」が、有意に高い正の値を示し、逆に「価値・規範」と「遊離」で低い有意な負の値を示した。そして「社交」では無相関であった。

#### 4. 家族環境各因子と自尊感情、および家庭における社会的スキルとの相関

自己価値尺度総得点と各項目得点との相関は.75～.55の高い値を示したので、その総得点を自尊感情得点とする。自己価値得点を目的変数とし、家族環境因子を説明変数とする重回帰分

表6. 自己価値を目的変数とし、家族環境を説明変数とした重回帰分析

	小学校		中学校	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的統合	0.34	20.52***	0.20	4.84**
価値・規範	-0.03	0.16	-0.11	1.65
遊離	-0.09	2.12	-0.10	2.12
社交	-0.02	0.09	0.26	11.19***

\*\*\*p<.05, \*\*\*\*p<.01

析を校種別に行なったところ、表6に示す結果が得られた。校種の違いにかかわらず、「情緒的結合」が有意の正の値を示した。また中学生は「社交」でも有意な正の値を示した。

次に、家庭における社会的スキルについて、3因子別に合計得点を算出し、その得点を目的変数にし、家族環境因子を説明変数とする重回帰分析を行なった。その結果は表7に示すとおりである。「関係維持行動」に対して「情緒的結合」が、小・中学校で正の、「価値・規範」が負の有意な値を示した。また小学校では「遊離性」も負の値を示した。「関係向上行動」に対しては、「情緒的結合」が小・中学校で正の値を、また「価値・規範」が小学校だけだが正の値を示した。「主張行動」に対しては、小学校だけで情緒的結合が正の値を示し、また小・中学校で、「価値・規範」および「遊離」が負の値を示した。家庭における社会的スキルには、一部例外はあるものの、家族環境の「情緒的結合」が正の、逆に「価値・規範」および「遊離」が負の影響をもつこと、しかし「社交」は何ら影響力をもたないことが分かる。

## 考 察

小学生および中学生が自分の家族をどう認知

表7. 社会的スキルを目的変数、家族環境を説明変数とした重回帰分析

	小学校					
	関係維持行動		関係向上行動		主張行動	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的統合	0.18	9.81**	0.34	43.96***	0.20	13.28***
価値・規範	-0.15	7.00***	0.18	12.27***	-0.29	29.76***
遊離	-0.23	24.67***	-0.07	2.46	-0.28	37.16***
社交	-0.01	0.01	0.05	1.27	0.03	0.49

	中学校					
	関係維持行動		関係向上行動		主張行動	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的統合	0.25	7.33***	0.49	33.16***	0.00	0.00
価値・規範	-0.30	12.63***	-0.03	0.19	-0.18	5.04*
遊離	-0.10	1.87	0.08	1.40	-0.42	36.21***
社交	0.07	0.81	0.07	0.88	0.06	0.63

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001



し評価するのか明らかにすることを目的に、家族環境測定尺度を作成した。作成された尺度は、家族が自由にコミュニケーションをもち、喜びや苦悩を共有する親密な、すなわち凝集性の高い「情緒的結合」の家族環境、学業達成や役割遂行、家族ルールに価値がおかれている「価値・規範」の家族環境、家族内外における人間関係の希薄さを意味する「遊離」の家族環境、そして親戚や知人との交流の多い「社交」の家族環境の4因子で構成されることが明らかにされた。本研究で開発された尺度は、小学生、中学生いずれにも負担なく実施可能であること、また因子構造が明瞭であることを特徴とするものであるといえる。また構成因子の内容は、家族の凝集性を含む「情緒的結合」、家族のルールを含む「価値・規範」、さらに凝集性の逆を意味する「遊離」のような先行研究で取り上げられてきた項目を含むものと、「社交」のような地域文化に特徴的な項目を含んでいる。すなわち、家族文化の一般性と独自性を含む構成内容も本尺度の特徴の一つである。

さらに本尺度は先行研究と異なり、家族に対する評価を含んでいない。かわりに、どのような家族環境が家族に対する肯定的評価につながるのか検討する可能性を残した。自分の家族が好きであるとか、家族と一緒にいると気持ちが落ち着くといった家族に対する満足感に関連する家族環境を検討することによって、家族環境尺度の構成的妥当性を吟味することができる。得られた結果は、「情緒的結合」の家族環境が家族に対する満足感を高めることに貢献するものであること、逆に「価値・規範」および「遊離」は家族満足感の低下につながるものであることを示すものであった。家族成員の親密な感情の交流がなされる凝集性の高い「情緒的結合」の家族環境と家族満足感との偏相関係数が.6に近い高い値を示したことは、凝集性機能のカーブリーニア性を主張する先行研究結果を否定し、そのリーニア性を支持するものである。本尺度は、家族の凝集性が「纏綿」というより「温かさ」を意味するものであることことを指摘した鈴木・小川(2000)にもとづいて、情緒的な家族交流が

なおされる温かな風土を意味する「情緒的結合」を家族環境の構成因とすることができた。それが家族満足感と高い関連性を示すとこの本研究結果は、家族の凝集性がリーニアであることを示唆するだけでなく、「情緒的結合」が家族環境の構成因として妥当であることを示すものである。一方、「価値・規範」の構成因が家族満足感と低い負の値を示したことは、拘束的で硬直した状態(高得点)も、いい加減で浮動的な状態(低得点)も、家族に対する不満を強めることが予想され、先行研究が主張してきたカーブリーニア性を示唆するものであり、尺度の構成因としての妥当性を示すものである。「遊離」と家族満足感との関連性も同様に、家族相互や、知人・隣人への無関心(高得点)が孤立感を強め、逆に強い関心(低得点)が干渉を生み緊張感を高めるというその解釈の可能性を示すものであり、尺度構成因の妥当性を示すものである。残念ながら、地域文化の特徴として仮定された「社交」は家族満足感と何ら関連性を示さず、その妥当性に不安を残した。

この「社交」は、中学生で自尊感情への正の影響を示したものの、家庭における社会的スキルには何ら影響力を示さなかったし、また信頼性もやや低いものであった。したがって、「社交」を尺度構成因とすることの妥当性にはある程度の限界があることを考慮する必要がある。

本研究は、家族に対する満足感に貢献する家族環境が自尊感情および家庭における社会的スキルに影響をもつことを仮定した。得られた結果は、家族に対する満足感に大きく貢献する「情緒的結合」が自尊感情を高めることに貢献するものであることを示すものであった。しかし、家族満足感の低下につながった「価値・規範」および「遊離」は自尊感情を低下させる効果を示さなかった。一方、家庭における対人スキルの場合、小学生で「情緒的結合」が正の貢献を、逆に「遊離」が負の貢献をすることが明らかにされた。小学生では、「価値・規範」は逆に家庭での手伝いなどの関係向上に正の貢献をすることが分かった。すなわち小学生では、



自分のいいかげんな生活態度を叱られる家族環境（「価値・規範」）を不満に思ったとしても、その圧力のもとで家の手伝いなどを行っている（関係向上スキル）様子がうかがえる。中学生になると、もはやその「価値・規範」の正の効果はみられなくなるのである。中学生になると、家庭内での主張や意思表示行動は家族の「情緒的結合」によるものとはいえないが、「価値・規範」や、特に「遊離」環境が強いほど、その行動が抑制される効果があることが明らかにされた。このように、家族満足感を高める家族環境が子どもの発達に正の貢献をする傾向や、逆に家族満足感を低下させる家族環境が負の貢献をする傾向が確認できたことは、本研究の予想をうらづけるものであり、そして本尺度の構成概念妥当性を支持するものである。

本研究で検討された家族環境測定尺度は、小学生および中学生に有用な尺度であることが確認された。今後、子どもの諸側面の発達を理解するために有用な道具として活用することができよう。ただし、そのためには、さらに妥当性の検討を重ねる必要がある。特に臨床場面や教育場面で本尺度を使用するためには、今後、基準関連妥当性について詳細な検討を行なう必要がある。

## 引用文献

①Epstein,N.B.Baldwin,L.M., & Bishop,D.S. 1983 The McMaster Family assessment Device. *Journal of Marital and Family Therapy*,9,171-180.

②Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.

③池埜聡・武田丈・倉石哲也・大塚美和子・石川久展・立木茂雄 1990 オルソン円環モデルの理論的・実証的検討 構成概念妥当化パラダイムからのアプローチ 関西学院大学社会学部紀要 第61, 83-122.

④Moos, R. 1987 *Social Climate Scale: User's Guide*. Consulting psychologists Press: PaloAlto, Ca.

⑤Moos, R. & Moos,B. 1975 A typology of Family social Environments. *Family Process*, 15,357-372.

⑥西出隆紀 1993 家族アセスメントインベントリーの作成 家族システム機能の測定 家族心理学研究, 7, 53-65.

⑦野口裕二・斎藤学・手塚一郎・野村直樹 1991 FES (家族環境尺度)日本版の開発: その信頼性と妥当性の検討 家族療法研究 8, 43-54.

⑧Olson, D.H.,Sprenkle,D.H.,& Russel,C.S. 1979 Circumplex model of marital and family systems:1.cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, 18,3-28.

⑨佐伯俊成・飛鳥井望・三宅由子・箕口雅博・山脇成人 1997 Family Assessment Device (FAD)日本語の信頼性と妥当性 精神科診断学 8, 181-192.

⑩佐々木保行 1996 父親の発達研究と家族システム—生涯発達心理学的アプローチ 教育心理学年報, 35, 137-146.

⑪立木茂雄・栗本かおり 1994 青少年における自我同一性の発達及びその拡散現象としてのアパシー傾向に対する家族システムの影響: 共分散構造分析によるグローティバントとオルソンのモデルの比較検討 青少年問題研究, 43, 1-30.

⑫戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から

教育心理学研究, 45,173-182。

⑬Walker,L.S., McLaughlin, F.J., & Greene, J.W. 1988 Functional illness and family functioning: A comparison of healthy and somaticizing adolescents. Family Process, 27,317-325.